

5月26日(土) 11:20~12:00 第二分科会:筑紫女学園大学スクワーヴァティーホール

---

## 東京国立博物館蔵普賢菩薩画像と法華懺法

神田外語大学 吉村 稔子  
YOSHIMURA Toshiko

---

東京国立博物館蔵普賢菩薩画像は院政期仏画の名品として知られている。しかしながら同時期の遺品とは聊か異なる作風を示し、その制作背景についても漠然と法華經信仰が想定されているにすぎない。本発表では、東博本が北宋画にもとづき、宮中法華懺法の本尊として制作された蓋然性について論じたい。

普賢菩薩像は天台宗の法華三昧の本尊として造像されたことが知られており、合掌する普賢像は円仁請來の唐本図像（「阿蘭若比丘見空中普賢影」）にもとづくとする説がある。同種の遺品のなかで12世紀の鳥取・豊乗寺蔵普賢菩薩像は、とりわけ古様な作例として注目される。豊乗寺本にみられる斜め横向きの顔に正面向きの鼻と反対側の耳を表した描法や豊満な体躯とそこに施された濃い量取は、奈良国立博物館蔵十一面觀音像を想起させ、奈良博本について既に論じられているように唐画に由来するものと考えられる。だが豊乗寺本と東博本とを比較すると、前者の丸顔で豊満なずんぐりした体躯と後者の細面で痩身の伸びやかな体躯とは著しい対照を示している。豊乗寺本が唐本を比較的忠実に継承しているとすれば、東博本が同じ時代の原本にもとづくものとは解し難い。他方、東博本の図像や表現技法については、既に長保3年（1001）の東京・總持寺蔵鑄造刻画藏王権現像や北宋の京都・仁和寺蔵孔雀明王像等との類似が指摘されており、痩身の体躯もまた北宋初期の浙江省温州市白象塔発見の塑像群等に認められることが注目される。仏画に比して遺品に惠まれた仏像においても、重量感を減じる傾向は平安中期から顕在化することが指摘されている。所謂和様彫刻にみられるこうした変化は、巨視的には北宋の仏教美術の影響下に推移したと考えられ、東博本のもとづいたものを北宋画と推定することも可能だろう。

別稿で論じたように、乾祐元年（948）の吳越王による天台經典の訪書使の派遣を契機に、吳越王を外交上の等位者とみた摂関家や天台山に対して本山意識をもっていた天台宗では吳越北宋仏教に対する関心が高まっていたと考えられる。北宋初期の天台宗には懺主と称えられた慈雲遵式（964～1032）がでて法華懺法の復興に尽力したが、日本でも長和4年（1015）三条天皇のとき藤原道長が初めて内裏（里内裏の枇杷殿）で延暦寺の懷寿を導師として法華懺法を修しており、同時代の中国仏教やその美術の伝播していたことが窺われる。このように考えたとき、本図の制作背景として院政期に修された法華懺法が注目される。保元2年（1157）後白河天皇は内裏で法華懺法を修し、のち後醍醐天皇の頃より始まった宮中御懺法講の滥觴とされた。大治2年（1127）に鳥羽上皇が真言院五大尊十二天を新造する際はじめ宇治經藏にあった大師本を手本としたように、本尊には然るべき古画の参照されたことが推測されるのである。